

行在礼部より世子尚賢あて、補貢の方物を取領したむねの咨

(二六四九、五、七)

行在礼部尚書具、旨に遵い廻文する事の為にす。

本月初五日、礼科の抄出を准く。該本部、前事を具題す。旨を奉ずるに、琉球国の差官は修貢して事竣れば該部、即ち回文を発し其れをして帰国せしめよ。該部知道せよ、とあり。此れを敬む。敬遵して内に照らすに、本年四月初六日琉球国の差官蔡祚隆、咨文一角を齎して福建布政司に移するの内に称すらく、隆武二年(一六四六)進貢して船一隻を駕するも久しく未だ回国せざる有れば、復び又硫黄等の物もて前来し補貢する有り、等の因あり。本部、布政司の偶^{なまたま}印官を欠くを以て、即ち来船を護送して太師建国公鄭(彩)の営中に至らしめて盤驗す。随いで啓奏して貢し来れる方物を將て上用に進供し、部に發りて察収せしむ。別に頒勅を行外、本部合心に移咨して照と為さしむべし。須らく咨に至るべき者なり。

右、琉球国中山王世子に咨す

監国魯四年(一六四九)五月初七日

咨

注*本文書は隆武帝の敗死を知らずに遣使した琉球に対する、南明の魯藩からの返書である。一通のみなので便宜的に隆武文稿の中に

まとめ、唐藩よりの文書の最後におかれたものと考えられる。なお隆武文稿の文書の配列については(二三六〇一)総注を参照されたい。

(1) 咨文 (三七一九)。

(2) 印官 印をもつて主任の職に当る官吏。ここでは布政使またはその代理の意であろう。

(3) 監国魯 南明の魯王朱以海(洪武帝の十世の孫)の年号。魯王は、南京が陥落して福藩が滅亡した後、一六四六年浙江省紹興で擁立され監国を称し、その後は浙江・福建を転々とした。一六四六年末より本文書の頃まで鄭彩の庇護下にあったが、一六五二年以降は福建省金門に拠っていた鄭成功を頼る。一六六二年没。

1-37-07

世子尚賢の、隆武帝の即位を慶賀する表(一六四六、二、□)

琉球国中山王世子臣尚賢、恭しく皇上の大宝に尊登するに遇い、普天と慶を同にす。臣尚賢、誠敬誠忭稽首頓首し謹んで表を奉りて賀を称する者なり。伏して以うに、紫極あり、天は四海を開き、乾坤を再闢に仰ぎ、瑤函あり、嶽は万年に聳く、曆世をトうに、以て五百歳の方与に欣逢し十八伝の首出するを快観すること無し。臣民慶び治い、遐邇歡騰す。恭んで惟うに皇帝陛下、允に厥の中を執り庶物に明るく、学躬の章布に光明より緝熙なる有り。生ま

れながらにして神靈あり、更に聞諫に拡充す。温仁恭儉にして志は徒さず。文景の小康、聖武の神あり。文功必ず存して商周大いに定まる。昔に在りては南陽に鳳翥り祥いに白水の讖を膺け、茲に閩海に竜の飛ぶに逢い瑞くも玄圭の錫を応く。是れ真に振古中興の盛にして千秋有道の長たる者なり。臣等幸いに唐虞の依りて日月を光かすに際し、天保の九を矢うも未だ馨く宜しきを尽くさず、嵩響の三を聴き喜びて同に効順す。伏して願わくは、皇靈赫濯として征有るも戦無く、東西の後を倭つの思いを慰め、聖武もて昭らかに宣べ徳を懐い威を畏れしめて南北の鐘篋の旧を復し、麻烈を將て比ぶれば高帝より隆くして、膚功は上せて玄穹に配られんことを。臣等、天を瞻み聖を仰ぎ歡忭踊躍の至りに任うる無し。謹んで表を奉り賀を称して以聞す。

隆武二年（一六四六）二月 日 琉球国中山王世子臣尚賢、

謹んで上表す

注(1) 瑤図 図は河図(易の八卦の基になった図)。瑤は美称。

(2) 方与 方輿に同じ。大地。

(3) 十八伝の首 十八代の皇帝の意。明は崇禎帝までで十七代。

(4) 允に厥の中を執り 誠にその中庸の道を守り守る。王者の守るべき徳。

(5) 韋布 なめし皮の帯と布の衣。質素な服装。

(6) 文景の小康 漢の文帝とその子景帝は賢主で、天下が安泰に治まったこと。

(7) 聖武の神 聖武は智徳完備の武勇、また漢の武帝。神は徳のきわめて高い者。

(8) 商周 殷と周。なお文功は周の文王の功績の意か。

(9) 白水の讖 後漢光武帝が白水郷から興起する予言。

(10) 玄圭の錫 玄圭は黒色の玉。禹王の治水事業の成功に当り、帝堯が贈った。

(11) 嵩響の三 嵩呼に同じ。(一三二〇七)注(19)参照。

(12) 赫濯 光り輝くさま。

1-37-08

世子尚賢の、詔諭三道の頒賜と絹匹の下賜に謝し、隆武帝即位の慶賀使を遣わすむねの奏(一六四六、三、九)

琉球国中山王世子臣尚賢、一本もて謹んで奏す。謝恩の事の爲にす。

礼部の咨を承遵するに称すらく、聖旨を奉ずるに、四夷は皆我が赤子なり。朕切に懐柔せん。遣使して琉球国王に敕諭・詔書三道を頒賜せよ、とあり。隆武二年(一六四六)正月二十一日国に到る。天威は顔を連れざること咫尺なるを敬畏す。理として合に良を消ひ吉を扱ひ、謹んで就ち二月初五日天使を奉迎し、王城に按臨して開読し、此れを飲み、欽遵し、虔んで方物を備え、王舅・長史・通事等の官の毛泰昌等を遣わし、京に赴き皇上の登極を慶